

『高齢単身独居者の喪主になる会社』の運営

高野 光 尊

はじめに

現代の日本において、急速な高齢化と核家族化の進行により、単身で生活する高齢者の数が増加している。このような高齢単身者は、家族や親戚と疎遠であったり、支えとなる人がいないために、老後や死後に対する不安を抱えることが多い。特に、身寄りがいない場合、病気や入院時に保証人が必要となるケースや、亡くなった後の手続き、遺品整理、供養の問題が生じる。これらの課題は、周囲の人々に大きな負担をかける一方で、適切に支援する仕組みが十分に整備されているとは言い難い現状である。

こうした状況の中で、私は僧侶としての経験と視点を活かし、高齢単身者が安心して生活できるよう支援を提供することを目指し、令和二年に「テラモス」を設立した。僧侶という立場を基に、葬儀や供養、死後事務といった役割を社会的責務として引き受けることは、宗教者としての使命と社会貢献の新たな形を見出す試みである。

高齢単身独居者の現状と課題

日本の高齢化は急速に進んでおり、それに伴って単身で生活する高齢者、所謂「おひとり様」の数も増加している。こうした高齢単身者は、頼れる家族や親族がいないため、老後や死後に対する問題を抱えることが多い。

まず、日常生活において、単身の高齢者は他者との関わりが少なく、孤立しやすい状況にある。年齢を重ねるにつれて身体的な健康問題や認知機能の低下が生じ、病气や怪我の際に周囲に支援を求めることが難しくなる。例えば、急な入院や施設入所が必要になった際に保証人がいないことで入院や入所を断られるケースも少なくない。家族がいないことは、高齢者の生活に直接的な影響を及ぼし、不安を増幅させる要因となっている。

また、家族や身内がいないことは、死後の手続きや供養の問題も引き起こす。遺産整理や遺品処理・葬儀・墓の管理などは通常家族や親族が対応するが、単身者にはそれを引き受ける人がいないため問題が深刻化する場合が多い。遺骨が無縁仏として扱われたり、遺品が適切に整理されず放置されるといった事態が発生しやすい。また、親族がいても遠方や疎遠な関係にある場合、死後の手続きにおいても支援が期待できないことが多い。

加えて、法的な問題も高齢単身者にとって大きな課題である。家族がいない場合の相続や財産の管理には遺言書の作成や法的な手続きが必要だが、多くの高齢者が遺言書を作成していない。そのため、死後の財産処理が複雑化し、適切に処理されないまま放置されるリスクがある。

これらの問題に対し、行政や地域社会のサポート体制はまだ不十分である。特に死後の手続きや身元保証といったニーズに対する対応が課題であり、高齢者が安心して生活し、尊厳ある最期を迎えるためのサポート体制の整備が急務である。

テラモスの概要とサービス内容

テラモスは、高齢単身独居者が抱える課題に対し、身元保証や死後事務、葬儀手配などの幅広いサービスを提供する企業である。

テラモスのサービスは主に四つの分野に分かれる。第一に、「身元保証サービス」である。このサービスは、身元

保証人や緊急連絡先をテラモスが引き受けるものである。多くの高齢者施設や医療機関は、入院・入居手続き時に緊急連絡先や死亡時の身元引受人、支払いが滞った場合の保証人などを必要とする。テラモスはこの役割を担い、契約者の希望に基づき、必要に応じて入院手続きや施設入所手続きを代理する。

第二に、「死後事務代理サービス」である。これは契約者が亡くなった後、必要な手続きを代理するサービスである。一般的に、死後の手続きには役所への届け出や遺品整理、家賃の清算などが含まれ、家族が引き受けることが多い。しかし、家族がない場合や、家族が遠方に住んでいる場合、死後事務が適切に行われず放置されることがある。テラモスでは、生前の契約に基づき、死亡届の提出、家の解約や遺品整理、各種サービスの解約手続きなどを遂行する。

第三に、「喪主代行サービス」がある。多くの高齢者にとって、死後の葬儀や供養に関する心配は大きい。特に、親族がない場合、誰が喪主となり、葬儀を取り仕切るかという問題が発生する。テラモスでは、契約者の希望に基づき、葬儀の準備から喪主の役割、葬儀の執行、そして納骨までを一貫してサポートする。僧侶がこの役割を果たすことにより、宗教的な価値観に基づいた丁寧な供養が可能であり、契約者は安心して最期を迎えることができる。

最後に、「生活サポートサービス」である。これは契約者が日常生活で困難を感じる場面や、入院中に必要となる支援を提供するサービスである。例えば、入院中の買い物や、必要書類の取り寄せ、家の管理など、契約者の生活に関わるさまざまなサポートを行う。また、契約者の希望に応じて、引越しや家財の処分もサポートする。

テラモスの実務事例

ここで、具体的な事例を通して、テラモスの実務内容について詳述する。

事例…七十二歳男性Aさんの入院支援から遺産管理を受任したケース

七十二歳の男性Aさんはアパートで一人暮らしをしていたが、体調不良で病院を受診した際にがんが見つかり、即時入院が必要と診断された。しかしAさんには保証人がいなかったため、病院は入院を認められない状況に陥った。そこで医療ソーシャルワーカーを通じてテラモスが紹介され、Aさんとの面談を行った。ヒアリングの中でAさんどのようなサポートが必要かを一緒に考えた結果、Aさんには入院保証人・死後事務サービス・入院中の身の回り品サポート・金銭管理・アパートの私物管理・アパート引き払い・遺言作成が必要であることが分かった。テラモスとAさんは契約を結び、テラモスが保証人としての役割を担い、入院後も病院とのやり取りや諸手続きを担当する事を病院側に伝えた。その後も入院中に必要な日用品の手配や自宅の管理をテラモスがサポートし、Aさんが安心して治療に専念することが出来る環境が整った。

症状に合わせて何度か転院し治療を続けていたがしばらく経ったある日、病院から危篤の連絡がありすぐに現地向かった。到着して医師とともに死亡確認を行い、葬儀社に搬送の依頼をして病室内の私物を片付けた。

搬送先の葬儀社にて枕経を勤め、関係先にAさんの死亡通知を行った。その後通夜葬儀・火葬収骨を行い、通夜と葬儀の導師は代表の私が勤め、喪主として弔問客の対応も行った。Aさんの交友関係から弔問客が極少数であることが予めわかっていたので、葬儀会場の規模や弔問の対応準備もスムーズに進めることが出来た。遺骨は自坊の永代供養壇に収蔵した。除籍簿の取得・遺言の写しの取得・各種行政手続きを行った。

その後遺言に従ってアパートの片付け・各種解約・遺贈を行って業務を終了した。

テラモスの運営上の課題

テラモスは運営上の課題も多岐にわたっている。高齢単身者の身元保証や死後事務委任といったサービスは、社会的ニーズが増加している分野であるが、法的、経済的、そして実務的な難しさが伴う。以下では、テラモスが直面し

ている主要な課題について詳述する。

1、法的な課題

テラモスが提供するサービスには、法的な規制や契約上の制約が伴う。特に、遺産整理や不動産の処理に関しては、民法や相続法に従わなければならない、相続人がいる場合はその意思を尊重しながら進める必要がある。こうした法的な制約を理解しながらサービスを提供するには、自身が十分な法的知識を持つだけでなく、各種専門家との連携が欠かせない。もし適法に業務を進行しなかった場合、その気がなくとも横領と見做されてしまったり相続人から損害賠償を請求されるリスクがある。

2、経済的な課題

テラモスのサービスは、金銭的に余裕のない高齢者も対象としているため、価格設定を抑える必要がある。その為なかなか売上げが伸びず経営が安定しないリスクがある。更に住居の退去費（畳替えの費用など）を会社が負担して売上げがマイナスになる事例も少なくない。現在は家屋管理業務や家財処分業など展開して会社全体の売上を維持してはいるものの、身元保証部門の収益のみでの運営は困難であろう。自治体や地域社会との協力や、寄付金などを含めた新たな収益構造の見直しが求められている。

3、実務上の課題

テラモスの業務では、病院や介護施設からの緊急呼び出しに迅速に対応する必要があるが人材の確保が必要となる。多くの依頼者は、体調が悪化してから急遽テラモスに依頼することが多く、業務をあと回しに出来ない場面もある。

また高齢者や単身者の状況や希望は多岐にわたり、それぞれのケースに合わせた個別対応が求められる。例えば、契約等の法律的業務、通院介助の様な介護的業務、遺品整理等の体力を要する業務、葬儀などの宗教的業務はそれぞれ必要とされる技能が異なるため、人員の確保育成が課題となっている。

4、認知度の課題

テラモスのサービスは、まだ新しい分野であり、社会的な認知度が低いという課題もある。多くの人は、高齢単身者向けの身元保証や死後事務の必要性について理解が不十分であり、その価値が十分に伝わっていない。また、一般的に「身元保証」や「死後事務」といったサービスに対しては、個人情報や遺産の管理に関する不安を持つ人も少なくない。テラモスは僧侶が運営しているため、一定の信頼が得られているが、それでも疑念や抵抗感を抱く人もいる。このため、サービスの信頼性を高めるための広報活動や、安心感を与えるための情報提供も重要な課題である。

僧侶が運営することのメリットとデメリット

テラモスのような「身元保証」や「死後事務」を提供するサービスにおいて、僧侶が運営することには、他の事業者にはない特有のメリットがある。一方で、僧侶ならではの課題やデメリットも存在する。以下では、僧侶が運営するメリットとデメリットについて述べる。

メリット

- ・人の死に対する深い理解と尊厳の重視

僧侶は、日常的に人の死に直面し、故人を供養する役割を担っているため、死に対する深い理解と尊厳を持ってい

る。このため、契約者が亡くなった際の遺体への接し方や、遺品の整理においても、故人の意向を尊重し、丁寧に対応する姿勢が自然と身についている。

・宗教的な価値観と社会的信頼

日本社会では、僧侶や寺院に対して一定の信頼感や敬意が存在する。宗教者が身元保証や死後事務を担当することで、単なるビジネス目的ではなく、社会的貢献や慈悲の心に基づいたサービスであるという安心感を与えることができる。特に、無縁仏や身寄りのない方への供養に対する責任感が強く、安心して任せられると感じる人も多い。このような社会的な信頼は、他の事業者には得られにくい僧侶ならではの強みである。

・他宗教や宗教者との調整能力

僧侶は、葬儀や供養において他宗教の考え方にも理解があり、必要に応じて他の宗教団体や宗教者と協力する事になってもその経験が生きる場面がある。また僧侶の知識と経験により、利用者の多様な宗教的価値観に 대응することが可能である。

・供養や納骨を任意に行う事が出来る

葬儀や納骨は、死後事務委任者にとって最大の心配事の一つである。特に葬儀や供養に関しては予算の関係上最初に削られる項目である。僧侶が死後事務の受任者となる事で、お金が無いから供養を受けられないという人に対して任意に供養を行うことが出来る。

デメリット

・経営と宗教活動のバランス

僧侶が運営する場合、宗教活動とビジネスの両立が課題となる。僧侶の活動は基本的に社会貢献や精神的なサポートが中心であるため、利益を重視したビジネス活動との折り合いをつけるのが難しい場合がある。特に、死後事務や身元保証業務には一定の費用がかかるため、適切な価格設定が必要だが、僧侶としての姿勢とのバランスを取りながら運営することが求められる。このバランスをうまく取れなければ、経営が安定しないリスクもある。

・法的知識や実務的スキルの不足

身元保証や死後事務には、法的な知識や実務的なスキルが必要とされる。たとえば、遺言書の執行や不動産の処分、各種役所への届け出といった業務には、民法や相続法などの法的知識が欠かせない。しかし、僧侶としての職務にはこうした法的スキルが含まれていないことが多いため、新たに学ぶ必要がある。また、実務的な処理や書類手続きの負担も大きいいため、僧侶にとっては未知の領域であるケースも多く、専門的なサポートが欠かせない。

・社会的な偏見や理解不足

一部の人々には、「僧侶が営利目的で活動をする事」に対して不信感や偏見が存在する。日本では、宗教活動はあくまで奉仕的なものと考えられる人も多く、僧侶が有料サービスを提供することに対して違和感を抱く人も少なくない。このため、テラモスのような活動がビジネスと宗教活動の融合であると理解されるまでには、時間と努力が必要であり、認知度を上げるための広報活動や啓蒙が求められる。

・人員の確保と育成の難しさ

僧侶は通常、葬儀や法事を主な業務としているため、身元保証や死後事務に必要な人員やリソースが不足することが多い。さらに、僧侶としての職務の傍ら、身元保証や死後事務を引き受けるとなると、時間的な制約もあり、対応に限界が出てくる。人員を増やすための育成も、特に宗教の価値観や遺族への配慮が重要な業務であるため、慎重な選定が必要であり、僧侶の人材を育成するのは簡単ではない。

以上のように、僧侶が運営することには、多くの独自のメリットがある一方で、宗教活動と営利事業のバランス、知識の不足、社会的な理解不足といった課題も存在する。これらの課題に対して適切に対応し、僧侶としての強みを活かしつつ、社会的な信頼を高めていくことが、テラモスのようなサービスの継続的な成功に欠かせない。

最後に

テラモスの利用者の三割近くは生活保護受給者の方々である。その方からは基本的に利用料を頂かず葬儀費用や納骨費用を頂かない事もある。テラモスの活動を通じて感じたことは、貧困と孤立は高い相関があるという事である。お金がない人は孤独になり易く、そしてお金がないと死後の供養を受けることすら出来ないというのが現実である。

我々僧侶は衆生救済・弱者救済を一つのテーマとしてきた。高齢のおひとり様をサポートする事で今後我々が僧侶としての役割を果たし、社会に存在感を示すことができるのではないだろうか。テラモスがただのサービス提供にとどまらず、高齢のお一人様を取り巻く社会問題を解決し、安心できる社会づくりに貢献できることを目指して頑張っていきたいと思う。